



Title	「おおきな(大きな)かぶ」の表現考察
Author(s)	清野, 隆
Citation	語学文学, 43: 11-23
Issue Date	2005
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8284
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

「おおきな（大きな）かぶ」の表現考察

清野 隆

平成十四年度から札幌市の小学校で使用する国語教科書は、これまで長い間採択されてきた教育出版から光村図書の教科書に変更になった。札幌市内の小学校の先生から「『大きな かぶ』は光村図書の教科書にも掲載されている。しかし、教科書によって『おおきな（大きな） かぶ』の表現が異なることは知らなかった。いままでと表現が違い、戸惑ってしまった」という話を聞いた。

本研究では教育出版と光村図書の教科書を中心にすえながら、『おおきな（大きな） かぶ』の表現の違いに注目しながら、作品（教材）理解との関係を考えてみたい。

現在、小学校の国語の教科書は五社（大阪書籍・学校図書・教育出版・東京書籍・光村図書）が検定を通り、教育現場で使用されている。『おおきな（大きな） かぶ』は五社とも小学校一年生の上の教科書に掲載されている。『おおきな（大きな）

かぶ』は、教科書改訂が行われても再掲載される定番の作品（教材）の一つである。

『おおきな（大きな） かぶ』はロシア民話を翻訳した作品（教材）であるため、翻訳者によって表現が異なる。翻訳者により表現が異なることは翻訳作品において自明のことであり、それゆえに翻訳の仕方が作品に影響を与えることになる。しかし、ここでは『おおきな（大きな） かぶ』のロシア語の翻訳の善し悪しを問題にするのではなく、日本語の表現の違いに焦点化して考えたい。

ここで取り上げるのは、教科書検定が済み、各地区で採択がなされ、平成十七年度（二〇〇五）の四月から各学校で使用される五社の教科書をもとにする。五社は平成十四年度と同一の出版社の教科書である。今回の教科書は部分改訂の年度にあたる。学力問題を背景に一部学習指導要領も改訂されたこともあり、各教科書とも発展教材を盛り込んでいる。『おおきな（大きな）かぶ』は前回同様五社の教科書に掲載し、二人の訳のいずれかをもとにしている。「うちだりさく」〈内田莉莎子〉やく」

(大阪書籍・学校図書・教育出版・東京書籍)と「さいごう たけひこ 〈西郷竹彦〉やく」(光村図書)である。なお、表現展開にあわせて挿入されている絵は一年生の児童の内容理解に影響を与えることが大きい。その絵は大阪書籍が「おた だいはち」、学校図書と教育出版と東京書籍が「さとう ちゅうりょう」が描いている。光村図書は教科書に明示されていない。

二

最初に教育出版の内田訳を示す。

おおきな かぶ

おじいさんが、かぶの たねを まきました。 ①

「あまい、あまい かぶに なれ。おおきな、おおきな かぶに なれ。」 ②

あまそうな、げんきの いい、とてつもなく おおきな かぶが できました。 ①

おじいさんは、かぶを ぬこうと しました。 ①

「うんとこしょ、どっこいしょ。」 ②

ところが、かぶは ぬけません。 ③

おじいさんは、おばあさんを よんで きました。 ④①

おばあさんが おじいさんを ひっぱって、 おじいさんが かぶを ひっぱって。 ②

「うんとこしょ、どっこいしょ。」
それでも、かぶは ぬけません。 ④③

おばあさんは、まごを よんできました。 ⑤①

まごが おばあさんを ひっぱって、
おばあさんが おじいさんを ひっぱって、
おじいさんが かぶを ひっぱって。 ②

「うんとこしょ、どっこいしょ。」
まだ まだ かぶは ぬけません。 ④③

まごは、いぬを よんで きました。
いぬが まごを ひっぱって、
まごが おばあさんを ひっぱって、
おばあさんが おじいさんを ひっぱって、
おじいさんが かぶを ひっぱって。 ⑥①

「うんとこしょ、どっこいしょ。」
まだ まだ、まだ まだ、ぬけません。 ③②

いぬは、ねこを よんで きました。
ねこが いぬを ひっぱって、 ④①

④③②

④③②

④③②

いぬが まごを ひっぱって、

まごが おばあさんを ひっぱって、

おばあさんが おじいさんを ひっぱって、

おじいさんが かぶを ひっぱって！

「うんとこしょ、どっこいしょ。」

それでも、かぶは ぬけません。

ねこは、ねずみを よんで きました。

ねずみが ねこを ひっぱって、

ねこが いぬを ひっぱって、

いぬが まごを ひっぱって、

まごが おばあさんを ひっぱって

おばあさんが おじいさんを ひっぱって

おじいさんが かぶを ひっぱって！

「うんとこしょ、どっこいしょ。」

やっつと、かぶは ぬけました。

次に、光村図書の西郷訳を示す。

大きな かぶ

おじいさんが、かぶの たねを まきました。

「あまい あまい かぶに なれ。大きな 大きな

かぶに なれ。」

あまい あまい、大きな 大きな
かぶに なりました。

おじいさんは、かぶを ぬこうと しました。

「うんとこしょ、どっこいしょ。」

けれども、かぶは ぬけません。

おじいさんは おばあさんを よんで きました。

かぶを おじいさんが ひっぱって、

おじいさんを おばあさんが ひっぱって、

「うんとこしょ、どっこいしょ。」

それでも、かぶは ぬけません。

おばあさんは、まごを よんできました。

かぶを おじいさんが ひっぱって、

おじいさんを おばあさんが ひっぱって、

おばあさんを まごが ひっぱって、

「うんとこしょ、どっこいしょ。」

やっぱり、かぶは ぬけません。

まごは、犬を よんで きました。

かぶを おじいさんが ひっぱって、

二①

三①

③

②

四①

②

③

⑤①

②

③

④

⑥①

①

②

④

②

おじいさんを おばあさんが ひっばって、
おばあさんを まごが ひっばって、
まごを 犬がひっばって、

「うんとこしよ、どっこいしょ。」
まだまだ、かぶは ぬけません。

犬は、ねこを よんで きました。

かぶを おじいさんが ひっばって、

おじいさんを おばあさんが ひっばって、

おばあさんを まごが ひっばって、

まごを 犬が ひっばって、

犬を ねこが ひっばって、

「うんとこしよ、どっこいしょ。」

なかなか、かぶは ぬけません。

ねこは、ねずみを よんで きました。

かぶを おじいさんが ひっばって、

おじいさんを おばあさんが ひっばって、

おばあさんを まごが ひっばって、

まごを 犬が ひっばって、

犬を ねこが ひっばって、

ねこを ねずみが ひっばって、

「うんとこしよ、どっこいしょ。」

とうとう、かぶは ぬけました。

九①

内田訳の教育出版と西郷訳の光村図書の表現の違いを整理すると、次のようになる。

七①

(1) 「おおきな かぶ」と「大きな かぶ」。題名及び本文中の②・①の仮名表記と漢字表記の違い。

④

(2) 二の①「あまい、あまい……。おおきな、おおきな……。」

と「あまい あまい……。大きな 大きな……。」読点表記の有無の違い。

(3) 三の③「ところが」と「けれども」、五の④「まだ まだ」

と「やっぱり」、六の④「まだ まだ、まだ まだ」と「まだ

まだ」、七の④「それでも」と「なかなか」、八の④「やつと」

と九の①「とうとう」の表記の違い。

④

(4) 四の②、五の②、六の②、七の②、八の②の「ひっばって」

と「ひっばって、」のダッシュ符号と読点の表記の違い。

八①

(5) 六の①以降の「いぬ」と「犬」の仮名と漢字の表記の違い。

(6) 二の①「あまさうな、げんきの いい、とてつもなく お

おきな かぶが できました」と「あまい あまい、大きな

大きな かぶに なりました。」の表記の違い。

(7) 八の②に集約されるように「ねずみ↓ねこ↓いぬ↓まご↓

おばあさん↓おじいさん↓かぶ」と「かぶ↓おじいさん↓おば

あさん↓まご↓犬↓ねこ↓ねずみ」と叙述の順序が逆になって

③

②

いる。

(8)全体を「八つの場面」と「九つの場面」に分けている。
以上(1)から(8)の八点で表記に相違がある。

三

(1)と(5)の「おおきい・いぬ」を「大きい・犬」の表記の差異については、どのように考えるのか。日本語の表記は漢字仮名交じり文で表記する。そこに、言い換えると、この場合は漢字で表記するのか平仮名で表記するのか。名詞及び用言の語幹は漢字表記が原則である。また、指導要領で示された学年別配当漢字でも「大・犬」は一年生で取り扱う漢字である。

教育出版の教科書の教材の配列では『おおきな かぶ』より先に学習する内容に漢字は一字も提示されていない。漢字を最初に学習するのは、その後の『けんかした 山』というあんどうみきお作の物語においてである。漢字を本文中に提示するのとあわせて象形文字の「山・月・木・口・川・人・手」などの漢字の成り立ちを学習する。したがって、その学習の流れから考えると『おおきな かぶ』では平仮名の表記になる。

光村図書では最初に学習する漢字が『大きな かぶ』で学習する「大・犬」である。「大・犬」を本文の流れの中で漢字を学習することとなる。漢字の取り上げ指導である。それまでの学習内容で漢字は一字も提示がなく、学習の流れから考えて急に漢字を本文中で取り扱うことにはやや無理があると感じられる。

漢字学習を考えた時に、漢字の成り立ちがわかる漢字、身近な生活言葉の漢字、例えば一・二のように数を表す漢字や月よう日、火よう日のように曜日を表記する漢字、そして形の似ている漢字(大・犬)などと段階を考慮して学習活動をすすめる必要がある。漢字の特質である字形(正字)・義(意味)・音(音訓の読み)の特質を考えなければならない。その上で漢字の指導する時に文章中で漢字を扱う取り上げ指導と漢字だけを一定の枠組みで指導する取り立て指導との組み合わせを考える必要がある。児童が最初に出会う漢字学習は、漢字に対する興味・関心を高める指導が大切だと考える。ただ、ここでは平仮名表記と漢字表記の差異によって『おおきな(大きな) かぶ』の内容理解に影響を与えないと考えられる。

次に、(2)の読点、(4)のダッシュ符号と読点の関係である。句点は文の終わりに打つことは明解である。しかし、読点の打ち方はどうするのか。「句読点は字と同じか、それ以上に重要な場合に打ち、「重要でないテンはうつべきでない」(注①)と本多勝一は述べた上で読点の基本原則を挙げている。一方、「句読点と云うものも宛て字や仮名使いと同じく、到底合理的には扱い切れない」(注②)という谷崎潤一郎の考え方もある。

国語の学習で句読点の打ち方は小学校低学年の言語事項に指導事項として明示されている。句読点だけでなくその他の符号を含めて書くことなどの学習で指導することは必要なことである。これまで文部省や総理府などから出された公用文に関する

要領を参考にして作成された『表記の手引き』が取り上げている「符号の使い方」が指導基準の目安になると考える。その中に読点の打ち方の七項目に「息の切れ目や、読みの間のところに打つ。」とあり、同じように「ー」（ダツシュ）は「語句を言いさして余韻をもたせる場合に用いる。」（注③）とある。

つまり、「あまい、あまい」あるいは「おおきな、おおきな」で読点を打つことにより、読み方に間が生じ、そのことが民話特有の語り口調を生み出すことになるのではなからうか。また、「ひっぱってー。」と「ひっぱって、」では、どのように違うのか。「ー」のダツシュの方は終わりを伸ばして読むことにより、かぶを抜くのに加わった者が一丸となり、力強さを感じさせ、次の「うんとこしょ、どっこいしょ。」へ繋がる読み方を生み出すことになる。

三番めは(3)の接続のことばの問題である。「ところが」と「けれども」は共にかぶをおじいさんが抜こうとしたのに抜けないことを示す逆接の接続のことばである。普通なら簡単に抜ける「かぶ」が抜けないことは意外なことである。その意外性を強調するのには「ところが」と「けれども」では、どちらが効果的な表現なのか。「けれども」は逆接になる内容を説明的になるのに対し、「ところが」の表現の方は逆接の意に意外性を含んでいる。甲斐睦朗は「ところが」には「おやおや」という驚きがある。それに対して「けれども」は、単純な逆接を表す接続詞であるので、その文を読み終えた段階で、初めてかぶが

ぬけなかった驚きを読み手に伝わる感じである。「けれども」はわかりやすさを、「ところが」は語りのおもしろさをもっている。」（注④）という。

「まだ まだ」と「やっぱり」の表記は、かぶがまごとおじいさんとおばあさんの三人でも抜けないことを強調していると同時に大変大きなかぶであることを示している。どちらの表現がそのことを表しているのか。「やっぱり」は予想通りかぶはまごの手伝いぐらいでは抜けないという説明的な感じを与える。ここも「まだ まだ」の方がかぶの大きさの強調表現としては効果的である。甲斐睦朗は「やっぱり」は、「前とおなじように」の意。（略）「やっぱり」の視点の中心は、かぶ側でなくおじいさんの側にある。（略）「まだまだ」は、表現の視点がかぶの側にある感じである。力を合わせてひっぱってもかぶはびくともしないというのである。」（注⑤）という。視点がかぶにあるのか、あるいはおじいさんの側にあるのかは、以後の表現を考えるとき物語の統一的な構成を生み出していく上で大事なことになっていく。

「まだ まだ、まだ まだ、」と「まだまだ」は犬が加わったにもかかわらず、かぶが抜けないことを示す表現である。「まだ まだ、まだ まだ」は四つの単語を途中で間をとりながら重ねていくことにより、それだけびくともしないかぶの大きさを感ぜさせる。言い換えると、反復の表現は「まだ まだ」をさらに重ねて表現することにより、かぶが大きく抜けないこと

を効果的に表現している。一方、「まだまだ」は一つの単語であり、前の「やっぱり」の繰り返しを避けた表現という感じである。甲斐陸朗は「まだ まだ」の積み重ねになっでいて、力を加えてもいっこうに微動さえもしないかぶのしぶとさが表現されている。(略)「まだまだ」は、まえの「やっぱり」との兼ね合いから、かぶは少し傾いたが、すっかりぬけるにはひっぱる力をもつと必要で、今の力だけでは十分でない状態が表現されている。(略)「まだ まだ、まだ まだ」は、かぶが揺れたことも、あるいは少しも傾いたこともないほどの強さが表現されている。(注⑥)という。「まだ まだ、まだ まだ」はかぶに視点があり、「まだまだ」は犬に視点があるといえる。

「それでも」と「なかなか」の表現では、「それでも」は猫が加わってもかぶは抜けない。それだけかぶが大きいことを表現している。「なかなか」は猫が加わったが抜けそうに抜けないかぶのようすを表している。前者はかぶの大きさ視点があり、後者は猫が加わったことにより、かぶが抜けるかどうかの状態に視点がある。つまり「それでも」は接続詞で、説明的になるが、「なかなか」は副詞で状態を表している。このことについても、甲斐陸朗は「(なかなかは・筆者挿入)ねこが手伝うとかぶはかなり傾いてきた。もう少しで抜けるぞ、だが、あと一歩というところで力がまだ足りない。(略)「それでも」は、単純な逆接を表す接続詞であるので「ねこが手伝っても」の意になって、あと一歩などという意味はもたない。(注⑦)という。

指摘の通りであるが、「それでも」は前の「まだ まだ、まだまだ」との関連で使われているから説明的になっても効果的な表現となる。

最後に「やっと」と「とうとう」である。「やっと」はこれまでの経過を含んだニュアンスが感じられ「とうとう」は結果を重視した感じがする。「やっと」は、これまでのおおきなかぶをぬく流れの一つとしての八場面であり、「とうとう」はこれまでのまとめとしての九場面の表現と考えている。

これらの問題について、汐見稔幸は次のように述べている。「内田訳の接続詞の並べ方は、その構造自体によって力のエスカレートぶりを伝える手がかりを与えているわけである。最後の「やっと」は、それだけに力の入れ方をエスカレートさせてきた結果ようやく、という意味が前提にされているから、読む者に深い実感をもって読みとられやすい。」さらに「内田訳は、文脈の論理に言葉の論理を付け加えることによって、読み手に感情の高揚を伝えやすくしているのだとも考えられる。言葉の論理とは、今みてきたような、「まだ」という語の繰り返し回数によって、感情の高揚や興味の度合いの違いを示して、その両側に「それでも」という語を配置して、その違いを浮き立たせようというようなことである。内田訳は、言葉の論理をうまく付け加えることによって、低学年の子どもでも話のダイナミズムを把握しやすくしている。」一方西郷訳について「けれども」「やっぱり」「まだまだ」「なかなか」「とうとう」というよ

うな、四文字(音)の接続詞にこだわっていて、接続詞の発生リズムを統一しているところに特徴があるが、その接続詞の関連がつくり出す言葉の論理性がそのものは明確でない。」とした上で、「語の持つ緊張感が同じレベルであり、それが単純に続くので、惰性化してしまう感じがするのである。そのため、文全体についても力動感、せり上がりが十分でなくなり、解釈する側もリズム感をもって作品世界に入り込む点で課題を残す印象になる。」(注⑧)と記している。この汐見の考えを裏付けるように西郷訳をもとにした『大きなかぶ』の授業実践記録の「たしかめよみ」の段階で示された板書記録(注⑨)を見ると接続の言葉が平板に並び、話の展開に即した盛り上げに欠けていることがわかる。

四番目に(6)で指摘した「あまそうな、げんきの いい、とて つもなく おおきな かぶが できました。」と「あまい あまい、大きな 大きな かぶになりました。」の差異を検討する。前者は「あまそうな」「げんきのいい」「とてつもなくおおきな」という三つの要素が「かぶ」に連体修飾句として被さっていく。三つの修飾句は生長したかぶを外側からどれも表現している。特に、「げんきの いい」はかぶの葉や根の表面に出ている部分がつやつやと張っていて、かぶ全体が生き生きとしているようにうすを表している。そのことが「あまそうな」や「とてつもなく おおきな」と結びつき、かぶそのものの生命力やたくましさを感じさせる。中村三春は「甘さ、大きさに加えて、「げん

きのよい」という修飾句が付加されることで、この蕪の属性として、活力・生命力の要素が算入されることになる。大地の豊穡と生命力、それこそが象徴的な意味で蕪に与えられたイメージにはかならない。この後、おじいさんらが蕪を抜こうとしても抜けないのは、むしろ蕪の豊穡さと生命力の強度のゆえとして読み取れるだろう。」(注⑩)と述べている。しかし、表現に対する解釈は右記のようになるが、その前に示されたおじいさんの願いである「あまい、あまい かぶに なれ。おおきな、おおきな かぶに なれ。」との表現との関連性を考えると、後者の西郷訳である「あまい あまい、大きな 大きな かぶになりました。」の方が児童に受け入れやすいのではないか。特に「げんきの いい」という擬人化した表現の理解は可能だとしても、「とてつもなく おおきな」は蕪の大きさをイメージ化がしづらい語句ではないだろうか。一方、前との流れの中で反復によるリズムある「大きな 大きな」「あまい あまい」の表現は一層生かされることになる。そのことにより「あまい」と「大きい」ことをかぶの特質としても強調されていく。そのことが、前者の文末の「」でできました。」は結果に重点が置かれ、後者の「」になりました。」は経過を含めた結果を表している表現にも出ている。

最後に、(7)で指摘したかぶをひっぱる時に、新たに加わった者の方から表現しているか、もとになるかぶの方から表現しているのか。前者は、「○○が○○をひっぱって、……おじいさ

んが かぶを ひっぱって。」と、その場面で新しく加わった、その前より小さく力の弱い者に視点がいき、その上でその小さく力の弱い者から順々に大きく強い者へと視点が移っていく。そのことがとてつもなくおおきなかぶと結びついていく。つまり、新たな者が一人(一匹)加わることによって、かぶのイメージがふくらんでいく傾向を生みだしていく。後者については、西郷氏が自らその根拠を三点あげて、次のように述べている。

「一 いわゆるロシア語の忠実な訳ということでは内田訳でいいのですが、それにこだわるよりも、日本語表現の常識な在り方を考えて、この再話を採りました。二 この民話は、最後に小さなねずみが登場してかぶが抜けるというところに感動の中心があります。つまり、小さな存在の大きな役割をクローズアップしたところにあります。そのねずみのイメージを引き立てるために、かぶが抜ける直前にねずみが引っぱった方がより効果的です。三 絵を見ると分かるように、かぶを中心に見るならば西郷再話の順序の方が素直であるし、また、実際に子供たちに劇遊びさせたり動作化させたりするときに、西郷再話の順序が動きに沿っていて自然ではないかと考えます。」(注⑩)と述べている。これに対して汐見は五場面を引用しながら「文を読むときは、キーワード的な語や言い回しに刺激されて、そのキーワードに関わる対象をなんとかイメージ化し、そのイメージの展開を予想して次の文に移っていく。そのことをふつう文脈をつくるといっているが、正確には、文脈をつくるために予想し

ながら読み、複数の文の連関をつけて文脈をつくっていくといふべきだろう。そのために、先行する文とあとに続く文のあいだでは、キーワードが近接していることが読み手にとって助けになる。」(注⑫)という。「おばあさんは、まごを よんできました。かぶを おじいさんが ひっぱって……」では、ここので先行する文のキーワードは「まご」であり、それに続く文のキーワードは「かぶ」である。つまり、「まご」と「かぶ」では前後の文のキーワードが乖離していることになる。さらに汐見は、「読み手は、追っていた相手がさっと消えてしまったような戸惑いを感じるにちがいない。「まご」と「かぶ」。この二つに論理的つながりをつけなければならなくなるのである。しかも、絵をみればわかるように、「かぶ」は列の一番先頭に位置しているが、「まご」は最後の位置にきている。おそらく絵の助けを得て、読み手は前の「かぶ」から「まご」に視点を移して、前が文脈をつくり直していかうとするだろう。(略)とくに一年生段階の子どもたちにとって、この視点の飛躍ということは、読みときⅡ文脈づくりと理解の流れの悪さの要因になることは疑えないように思う。(略)文学作品の理解においては、一文ごとの視点の揺れということ、読みの妨げになる最大の要因になりかねない。」(注⑬)と指摘し、児童の表現を理解する思考の流れを考えた時、西郷訳の不自然さ、イメージの流れの悪さをあげている。さらに、「かぶを おじいさんが ひっぱって、つまり「……を……が……」の形の文構造になっ

ていることに對し、「小さな子どもたちにとって、目的語（対象語）が主語よりも先にくる倒置型の文は、必ずしも読みとりやすくはない。」（注⑭）という。つまり、西郷氏が自ら訳で述べた三点である日本語の表現の側面、その表現をもとに学習する子供の読みの視点（思考の流れ）、さらに読みの理解をもとに動作化する上からも、必ずしも適切ではないことになる。

四

内田訳を基にした教育出版と西郷訳を基にした光村図書の教科書では表現が異なっている。そのことが児童の理解や学習活動に微妙に影響を与えることが予想される。では、内田訳を掲載した四社の教科書は同一の表現であるのか。ところが表現が異なっているのである。教育出版の内田訳との対比で他の教科書の内田訳を示して、その表現の違いをあげていくと、次のようになっている。

(1) ①「おじいさんが、かぶの たねを まきました。」が「おじいさんが、かぶを うえました。」（学校図書）

(2) ①「あまそうな、げんきの いい、とてつもなく おおきな かぶが できました。」が「あまい、げんきの よい、とてつもなく おおきい かぶが できました。」（大阪書籍・東京書籍）「あまい、げんきの よい、とてつもなく おおきな かぶが できました。」（学校図書）

(3) ④②・五②・六②・七②・八②「略」ひっぱってー。」

が「略」ひっぱって、」（大阪書籍・学校図書・東京書籍）

(4) ⑤④「まだ まだ、かぶは ぬけません。」が「まだまだ、かぶは ぬけません。」（大阪書籍）

(4) ④②・五②・六②・七②・八②「ねすみが ねこをひっぱって、ねこが いぬを ひっぱって、いぬが まごを ひっぱって、まごが おばあさんを ひっぱって、おばあさんが おじいさんを ひっぱって おじいさんが かぶを ひっぱってー。」が「ねずみが、ねこを ひっぱって、ねこが、いぬをひっぱって、いぬが、まごを ひっぱって、まごが、おばあさんを ひっぱって、おじいさんを ひっぱって、おじいさんが、かぶを ひっぱって、」（学校図書）

(5) ⑥④「まだ まだ、まだ、まだ、ぬけません。」が「まだまだ、まだまだ、ぬけません。」（大阪書籍）

(6)「やつと、かぶは ぬけました。」だけで一段落（東京書籍）
どうして同一訳者であるのに、このような違いがあるのか。

教育出版の教師用指導書には、訳者と相談のうえ子供の発達段階に合わせて表現を改めた旨が表記されている。つまり、各社とも内田訳をもとにしながら、編集に携わった関係者が教育出版と同様の主旨で表現の手直しを試みているのである。そこには子供の発達段階を考慮しているだけではなく、日本語表現に對する編集者の意識の違いがあると考えられる。言い換えると、子供の認識過程と日本語表現という側面から国語科教育について考える問題を抱えていることになる。

では、基底となった内田訳はどのように表現されていたのか。
一九六二年五月一日に「福音館書店」から発行された『月刊予
約絵本「こどものとも』』の普及版の「おおきな かぶ」を見
ると、次のようになっていた。

おじいさんが かぶを うえました。

「あまい あまい かぶに なれ。おおきな おおきな かぶ
になれ」

あまい げんきのよい とてつもなく おおきい かぶが
できました。

おじいさんは かぶを ぬこうとしました。

うんとこしょ どっこいしょ

ところが かぶは ぬけません。

おじいさんは おばあさんを よんできました。

おばあさんが おじいさんを ひっぱって、

おじいさんが かぶを ひっぱってー

うんとこしょ どっこいしょ

それでも かぶは ぬけません。

おばあさんは まごを よんできました。

まごが おばあさんを ひっぱって、

おばあさんが おじいさんを ひっぱって、

おじいさんが かぶを ひっぱってー

うんとこしょ どっこいしょ

まだ まだ かぶは ぬけません。

まごは いぬを よんできました。

いぬが まごを ひっぱって、

まごが おばあさんを ひっぱって、

おばあさんが おじいさんを ひっぱって、

おじいさんが かぶを ひっぱってー

うんとこしょ どっこいしょ

まだ まだ まだ ぬけません。

いぬは ねこを よんできました。

ねこが いぬを ひっぱって、いぬが まごをひっぱって、

まごが おばあさんを ひっぱって、おばあさんは おじいさ

んを ひっぱって、おじいさんは かぶを ひっぱってー

うんとこしょ どっこいしょ

それでも かぶは ぬけません。

ねこは ねずみを よんできました。

ねずみが ねこを ひっぱって、ねこが

いぬを ひっぱって、いぬが まごを ひっぱって、
まごが おばあさんを ひっぱって、おばあさんが
かぶを ひっぱって―

うんとこしょ

どっこいしょ

やっと、

かぶは ぬけました。

基底となった内田訳と各教科書表現との違いは、「…よんで
きました。」を「…よんで きました。」のように文節の区切り
方を訂正している。また、かけごえにあたる「うんとこしょ
どっこいしょ」の部分に表記されていなかった「」を補って
いる。さらに読点を最小限の使用にとどめていたのを必要によ
り適時補っていることが主な特徴である。

基底となった内田訳と各教科書表現との関係は論ずることは
改めて論を起さなければならぬ問題である。今、一つだけ
挙げておくと「おじさんが、かぶの たねを まきました。」
について内田は「まくとうえるとではまったく違います。まく
というのは複数の種子をばらばらまくことでしょう。でもうえ
るは、一つずつ土の中に埋めこむことです。ばらっと種子をま
いて、どうしてとてつもなく大きなかぶが育つでしょうか？お
じいさんが愛情をこめて一つぶの種子をうえた、となぜ考えら

れないのでしょうか。原文は、おじいさんが一つのかぶをうえ
ました、となつています。」(注⑮)と述べている。つまり、必
ずしも教科書編集者の手直しに賛意を現しているわけではない
ことがうかがえるのである。ただ、訳者の考えと一年生の段階
のことばの習得を考えた時、慣用的な語と語の結びつきと効果
的な表現との関係を検討することが必要である。

さらに、「おおきな(大きな かぶは)」は昭和二十九年度の
学校図書の教科書に『大きな かぶら』という題目で最初に掲
載されて以来、今日に至っている。「おおきな(大きな) か
ぶ(かぶら)」の表現の範囲(部分掲載か全文掲載か)を含めて、
その表現は改訂毎に教科書によって異なっている。教科書の変
遷にともなう「おおきな(大きな) かぶ」の表現の差異の問題
もある。

注 ① 本多 勝一 『日本語の作文技術』 一九九二年六月

第二三刷 朝日新聞社 八七頁

② 谷崎潤一郎 『文章読本』 一九九一年五月二六版

中央公論社 一五一頁

③ 松村 明 校閲『表記の手引き』 一九九二年六月第

四版教育出版 二二六頁

④ 甲斐 睦朗 『実践国語研究 別冊―「おおきなかぶ」

「大きなかぶ」の教材研究と全授業記録―』 一九九〇年

十二月 明治図書 一五頁

- ⑤ ④と同掲書 一二二頁
- ⑥ ④と同掲書 一二三頁
- ⑦ ④と同掲書 二四頁
- ⑧ 汐見 稔幸 『文学の力×教材の力―「おおきなかぶ」の教材としての教育的価値―』二〇〇一年三月 教育出版 三七頁
- ⑨ 西郷 竹彦 『西郷竹彦文芸教育著作集卷(14)文芸の授業』第三版 一九八二年十二月 明治図書 八三・八六頁
 (論文枚数との関係で、板書記録を本文中に掲載しなかったが、各自参照して欲しい)
- ⑩ 中村 三春 ⑧と同掲書の「「おおきなかぶ」を抜くものたち」 一一頁
- ⑪ 西郷 竹彦 『小学校国語教師用指導書一年』 一九八三年三月 光村図書 一六七頁
- ⑫ ⑧と同掲書 三三二頁
- ⑬ ⑧と同掲書 三三三頁
- ⑭ ⑧と同掲書 三四頁
- ⑮ 内田 莉莎子 『小学国語1年教師指導用解説編(上)』教育出版 一九八三年三月 一三三三頁